

『他者の苦痛へのまなざし』 スーザン・ソントグ 第7-9章レジュメ

7

「写真のインパクトについて、今や常套句となりつつある、2つの広く流布した思想を取り上げよう[···]それらに異議を唱えたい」 p103

- ① 人々の注意はメディアが取り上げるものによって、なかでも決定的映像によって、操作される
- ② 過剰な映像はついにわれわれの感じる能力を減じ、われわれの良心を刺激することが少なくなる

つまり、「写真は同情を生むと同時に、同情を萎縮させる」 p104

→「この問題は主要な報道メディアであるテレビの問題に帰着する。映像はそれが用いられる方法、どこでどれほどの頻度でそれが見られるかによって、迫力を失う。テレビで示される映像は本来、遅かれ早かれ人が飽きる映像である。

[···]

内容により深くかかわるためには、或る種研ぎすまされた意識が必要である。そのような意識こそ、メディアが流布する映像に付随する予測のために弱められ、メディアが映像の内容を漉して取り去るために鈍化されるもの」 p104-105

同じような批判は、ワーズワース『叙情小曲集』（1800年）、ボードレールなどによりなされる。

「戦争の苦しみはテレビのおかげで、夜毎の陳腐な番組と化した。かつては衝撃を与え怒りを喚起した映像が溢れるなかで、われわれは反応する能力を失いつつある。他者を思いやる気持ちは極限まで行使されると麻痺する、というふう一般に分析されている。しかしここで本当に求められていることは何だろうか」 p107

スペクトル化（1つの出来事が人人間全体のイメージになること）はレトリック

「1つ1つの出来ごとがわれわれにとって現実となる—つまり関心を喚起する—ものとなるためには、それはスペクトル化されねばならない。人間自体がイメージとなること、つまり有名人になることを志向している。現実はずき、現実の再現のみ、メディアのみが存在する」 p108-109

↓

説得力のあるレトリック（にすぎない）

↓

「現実がスペクトル化したと言うことは、驚くべき偏狭な精神である。それは報道が娯楽に転化

しているような、世界の富める場所に住む少数の知識人のもの見方の習性を一般化している。その見方は「モダン」な人々が最初に身につけるものであり、現実的な対立や論争をもたらす、党派に基盤を置いた、伝統的な政治学を解体するための必要条件である。それは誰もが見物人であるということを前提にする。それはかたくなに、不真面目に、世界に現実の苦しみは存在しないことを示唆する。」 p110

「現代の市民たち、スペクトルとしての暴力を消費する人たち、リスクを負うことなしに戦争の近くに身を置く達人たちは、誠実の可能性を信じないように訓練されている。感動しないているためなら何でもするような人々もいる。危険から遠く離れて、自分の椅子に座して、優越的立場を主張するほうがどれほどか楽だろう。」 p111

【職業写真家のロウはソマリアとサラエヴォの写真を同じ画廊で展示した。サラエヴォの人はソマリアの写真がそこに含まれていることに不満だった】

職業写真家は・・・

「ロウの考えでは、問題は単純で、自分は職業写真家であり、その2つの作品群は彼が誇れるものだった。」 p112

サラエヴォの人にとって・・・

「自分たちの苦難を他の民族の苦難と並べて示すことは、その2つを比較すること（どちらがよりひどい地獄であるか、と）であり、サラエヴォの人々の殉死を単なる一事例におとしめる[・・・]自分の苦しみが他の誰かの苦しみと比較されるのは耐え難いこと」 p113

8

「残虐な映像をわれわれにつきまとわせよう。たとえそのような映像が象徴に過ぎず、それが言及している現実を到底網羅していなくても、それらはなお重要な機能を果たしている。映像は語りかける。人間はこんなことまでやるのですよ、熱意をもって独善的に、進んでやろうとさえするのですよ。覚えておきなさい。」 p115

記憶

「記憶することは確かに倫理的行為[・・・]無情と健忘は連携している[・・・]平和を結ぶことは忘れることである。和睦するためには、記憶に欠陥があり、記憶が限られたものであることが必要なのだ。

人間にとって自分が生きるためのいくばくかの場所をもつことが目標ならば、それならば、人間はどのような場所においても互いに恐ろしいことをするものだという、より一般的な認識のなかに、特定の不正の記録が溶解することが望ましい」 p115-116

自分に嫌な思いをさせる映像から顔を背けるのが普通

「戦争関連のニュースが今では世界じゅうに流布しているという事実は、遠い地域にいる人々の苦境を考える能力がそのぶん強化されたことを意味しない。現代の生活—注意を向けるよう促される物ごとが過剰にある生活—では、自分に嫌な思いをさせる映像から顔を背けるのが普通であるように思われる。メディアが戦争その他の破廉恥な行為が引き起こす人間の苦しみを伝えるためにより多くの時間を当てれば、さらに多くの人々がチャンネルを切り替えるだろう。しかしだからといって、人々が反応していないわけではないだろう。」 p116-117

挫折感

「映像が提示するものについてわれわれが何もし得ないという挫折感は、そのような映像を眺めることの不当、あるいはそのような映像が流される仕方—それらが皮膚軟化薬、鎮痛剤、SUV（スポーツ汎用車）の広告にはさまれるかたちで流れることもある—の不当にたいする非難へと転化されるかもしれない。映像が提示するものを何とかできる力がわれわれにあったなら、われわれはこのような問題にこれほどこだわらないだろう」 p117-118

一步退いて考えることは何ら間違っていない

「写真が提供する抽象化された現実には道徳的に是認できないものがある。人間は他者の苦しみを、距離を置いた地点から生々しさをそぎ落としたかたちで経験する権利はなく、従来賞賛されてきた、視覚のもつすばらしい性質にたいしてあまりに大きな人間的（ないし道徳的）代価—世界のなかの攻撃や侵略から一步退き、そのために観察をして選択したものにのみ注意を向けることが可能だという—を支払っている。しかしこれは知性そのものの機能を言い換えているに過ぎない。

一步退いて考えることは何ら間違っていない。」 p118-119

9

空間の問題

「その写真を眺めるための神聖な、瞑想空間ともいうべきものが必要だろう。深刻な内省のための空間は現代の生活ではめったに存在しない。」 p120

「良心的な写真家たちの仕事をめぐる昨今の懐疑は、煎じ詰めれば、写真がかくも広範囲に流布されているという事実、そのような写真を畏敬をもって眺め、それを十分に受け止める環境が保証されていないことへの不快感」 p121

芸術となること

「もっとも深刻な、または心を引き裂くような主題をもつ写真が芸術であるかぎりにおいて—どのような異議があろうと、壁にかけられるとき写真は芸術となる—写真は、公共の空間に展示された、壁にかけられあるいは床に置かれたすべての芸術作品と運命を共有する—つまり写真は、ふつうは連れをともなったそぞろ歩きの途中の一地点となる」

↓

本は、一人で眺め、しばし考えるので、本の中の方が、重みと深刻さが強くなる

『戦士した兵士たちは語る』（1992年、ジェフ・ウェール作成）

「死者たちは生きている者たちにたいして、自分の命を奪った者たちにたいして、目撃者たちにたいして、またわれわれにたいして、まったく関心がない。彼らがわれわれのまなごしを求める必要がどこにあるだろう。彼らはわれわれに何を言う必要がある。「われわれ」—この「われわれ」とはこの死者たちの体験のようなものを何も体験したことのないすべての人間である—は理解しない。われわれは知らない。われわれはその体験がどのようなものであったか、本当には想像することができない。戦争がいかに恐ろしいか、どれほどの地獄であるか、その地獄がいかに平常となるか、想像できない。あなたたちには理解できない。あなたたちには想像できない。戦火のなかに身を置き、身近にいた人々を倒した死を幸運にも逃れた人々、そのような兵士、ジャーナリスト、救援活動者、個人の目撃者は断固としてそう感じる。そのとおりで、言わねばならない」 p126-127